



バッハの森通信

第134号
2017年
1月20日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

楽しみませんか

“真理”を後回しにしないで

新年、おめでとうございます。今年も多くの方々からお年賀をいただきましたが、皆さん、元気に活躍なさっている様子や、お子さんたちの成長ぶりを報告してくださいました。そして、新しい年に寄せる明るい希望が書き添えてありました。このような、例年と“変わらない”内容のお年賀を、今年、私は特別な思いで読ませていただきました。

暮れに、外国、特にヨーロッパの友人たちからいただいたクリスマス・カードの添え書きが、程度の差こそあれ、不安に満ちていたからです。その中でも「疲れた」という言葉が印象的でした。無理ありません。ヨーロッパの皆さんは、次々に押し寄せる難民・移民の群れと、いつどこで起こるか分からないテロの恐怖に怯えて暮らしているのですから。

* * *

誰しも、こういう状況を変えて「平和」を取り戻したいと願うのは当然です。ただ、どうやって変えるかが問題です。明らかに、これは“政治”の問題です。新聞やテレビの報道によると、難民とテロに対する不安が、急速なグローバリズムが生み出した経済的格差に苦しむ不満と重なり、自己防衛的、排他的な雰囲気となって、ヨーロッパのみならずアメリカの社会でも風靡しているようです。

しかし、世界中がこれだけ相互依存関係で結びついている現代、排他的自己防衛を唱えることは、時代錯誤であるばかりか、国家と国家、民族と民族の間の摩擦を増大し、世界を不安定にする危険性をはらんでいることが、良識ある人々によって指摘されています。ところが、実際には、このような良識を排除する自己防衛ファーストの声が、世界各地の民衆の間で大きくなってきているようです。

その結果、民衆の不満と不安に応じて人気取りをする政治、いわゆる「ポピュリズム」が横行しています。その政治的リーダーたちがとる手法を適格に表現する言葉が、「今年の単語」として去年暮れに

『オックスフォード英語辞典』から発表されました。それは“Post-Truth”「ポスト・トゥルース」という英語で、日本語には「ポスト真実」「ポスト事実」などと翻訳されています。しかし、これでは意味がよく分かりません。「ポスト」はラテン語で「後に」を意味し、“post-script”の略、P. S. 「追伸」はよく知られています。私は、「ポスト・トゥルース」とは、「真実、事実は後回し」という意味と理解しました。客観的な真実や事実はどうでもよくて、たとえ嘘八百でも感情に訴える言葉で民衆の心を掴めば成功だ、という政治手法です。その結果、イギリスが欧州連合を離脱し、アメリカの次期大統領が選出された、というわけです。

* * *

「疲れた」というヨーロッパの友人たちに同情して語りだしたら、政治の闇に紛れ込んでしまいました。それは創立目的に反するからです。その事情をナザレのイエスの言葉を借用して説明しましょう。ローマ人が占領するユダヤで納税することは、神の教えである律法に反することではないか、という質問を受け、ローマ皇帝（カイサル）の肖像が刻印された貨幣を指してイエスは答えました。「カイサルのものはカイサルへ。神のものは神へ」。

普遍的な解釈をすると、「カイサルのもの」とは“政治・経済”に関すること、「神のもの」とは、それ以外のことです。この関係を、イエス時代よりさらに500年以上前に制定された「安息日法」が明らかにします。これは、一週間のうち6日は働け。すなわち、政治・経済活動をしろ。しかし、7日目は働いてはならない。その代わりに“楽しみ”という法律です。この法律の精神は、人間が人間らしく生きるための“真理”（トゥルース）です。

バッハの森の創立目的は、バッハの音楽を“7日目に楽しむ”ことです。だから政治活動はしないのです。うっかりすると、私たちは、すぐ「ポスト・トゥルース」（“真理”は後回し）になる生活をしています。ヨーロッパの人々が見失っている「平和」を享受できる幸いに感謝して、政治・経済活動以外の“一日”を、バッハの森で“楽しみ”ませんか。皆様のご参加をお待ちしております。（石田友雄）

異邦人に顕現したメシア

天の王国を目指す熱い心

去る12月11日に、バッハの森ではクリスマス・コンサートが開かれ、J. S. バッハのカンタータ：「彼らは皆シェバより来るであろう」(BWV 65/1, 2) が演奏されました。

1. 彼らは皆シェバより来るであろう。
黄金と乳香を携えて来て
主の栄光を告げ知らせるであろう。
(イザヤ書 60 章 6 節)

2. 王たちがシェバよりそこに来た。
彼らは黄金、乳香、没薬を携えて来た。
ハレルヤ。
(「一人のみどり児がベツレヘムで生まれた」 4 節)

このカンタータの演奏に先立ち、次のメディタツィオが、朗読されました。

* * *

天にメシアを探し求めたマギ

教会の暦によると、12月25日に始まるクリスマスは、翌年の1月6日まで、13日続く大祭です。今年、私たちは、クリスマス・コンサートのテーマとして、クリスマス・シーズンを締めくくる1月6日の祝日、エピファニアス（顕現祭）を選びました。

「顕現」とは、隠れている神々が人間に姿を現すことです。キリスト教の顕現祭は、イエス・キリストがこの世に顕現したことを祝う祭りです。マタイによる福音書2章が、その様子を伝えます。それによると、ヘロデ王の時代に、東の国の賢者、乃至は博士たちがエルサレムに来ました。「賢者」と訳した言葉は、古代ペルシャ語に由来するラテン語で「マグス」、その複数形「マギ」で知られています。なお「マギ」は英語のマジシャンの語源です。しかし「マギ」は手品師でも魔法使いでもありません。東の国、古代ペルシャで発達した占星術、すなわち、星の動きを観察して神々のみこころを知ることができる祭司を指します。

さて、エルサレムに来たマギはヘロデ王に訊ねました。「私たちは東の国でユダヤに新しい王が生ま

れたことを知らせる星を発見しました。新しい王はどちらですか?」。自分の王位を狙う者が生まれたと思ったヘロデは恐ろしくなり、学者たちを招集して調べさせたところ、聖書の預言によると「キリスト」はベツレヘムで生まれる、と答えました。ここで、「新しい王」が、突然「キリスト」にすり替わっていることに注意してください。「キリスト」はヘブライ語「メシア」のギリシャ語訳で、本来、「油を注がれた者」を意味するダビデ家の王の称号でした。実際、この預言は、「選民イスラエルの指導者」がベツレヘムから出る、と語って終わります。ベツレヘムはダビデ王の出身地です。

ヘロデ王は、マギをベツレヘムに送り、幼な児をみつけたら私に知らせてくれ、私も行って拝むから、と言いました。そこで彼らは東の国で見た星に導かれてベツレヘムに行き、その星が止まった家に入りました。そこに、母マリアと幼な児を発見したマギは、幼な児キリストを礼拝し、携えて来た宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を捧げました。その後で、ヘロデのところに帰るな、という神のお告げを受けたので、別の道を通って東の国に帰って行きました。

顕現祭のための福音書はここで終わります。ご存知のとおり、この物語には続きがあります。それによると、だまされたことを知ったヘロデは大変に怒り、ベツレヘムとその周辺にいた2歳以下の男の子を一人残らず殺させましたが、幼な児イエスはマリアとヨセフに守られてエジプトに避難し、ヘロデが死ぬまでそこに留りました。このエジプト避難の物語は、順序が逆になりますが、顕現祭の前の日曜日の福音書に指定されています。

異邦人の救い主

顕現祭のための降誕物語は、いろいろなことを象徴的に語っています。イエス・キリストの誕生は、まず天に現れた星によって示され、彼が天に属す方であることを告げ知らせます。この星を発見したペルシャ人のマギが、幼な児キリストを最初に礼拝した人々になりました。言い換えれば、キリストの顕現を受けた最初の人々です。ところが、ユダヤ人の王ヘロデは、幼な児イエスを殺そうとして探させましたが、みつかることができませんでした。この物語は、キリストを自分の「メシア」として探し求める人には、ユダヤ人、異邦人の区別なくキリストは顕現すると語っているのです。

4世紀にミラノの大司教であったアンブロシウスが、「Veni, redemptor gentium」 「来てください、異

邦人の贖い主よ」というアドヴェントの歌を作詞し、それを16世紀にルターはドイツ語に翻訳して“**Nun komm, der Heiden Heiland**”「さあ来てください、異邦人の救い主よ」というコラールにしました。ここで、「異邦人の」と訳したラテン語“**gentium**”、ドイツ語“**der Heiden**”は、本来「選民以外の世界の諸民族の」という意味です。では、キリスト教徒のアンブロシウスとルターは、「異邦人の救い主」という呼びかけで、何を意味したのでしょうか。この問題は、もう少し後で考えます。

いずれにしても、ベツレヘムで幼な児キリストを礼拝したマギについて、その後、数々の伝説が生じ、語り継がれてきました。先ず、彼らが三つの宝物、黄金、乳香、没薬を捧げたことから、マギは3人いたと考えられるようになりました。ついで、3人の賢者、乃至、博士は、3人の王になり、カスパル、バルタザール、メルキオールという名前がつけられ、老人のヨーロッパ人、壮年のアジア人、青年のアフリカ人になりました。これは、あのマギが、全世界の諸民族、各世代の人々を代表してキリストを礼拝した異邦人たちだったと考えられたためです。

エルサレムに輝く主の栄光

次に顕現祭のための使徒書について考えましょう。使徒書は、各日曜日の礼拝のテーマを定める福音書を、補足説明するために古代教会が定めた聖句で、福音書以外のどこからでも選ばれます。顕現祭のための使徒書は、さきほど朗読した旧約聖書のイザヤ書60章の初めで、研究者が第三イザヤと呼ぶ預言者の預言です。

紀元前6世紀末、約50年続いたバビロン捕囚から帰還したユダヤ人が、廃墟と化していたエルサレム神殿を再建しました。第三イザヤは、その前後に、しばしば挫折しそうになる帰還民を励ました預言者です。預言冒頭の「起きよ、光を放て。お前の光が来て、主の栄光がお前の上に輝くから」という言葉は、エルサレム、乃至は、神殿の丘シオンを擬人化した呼びかけです。預言者は続けて、今、世界の諸民族は暗闇に覆われているが、お前の上に主の栄光が現れると、異邦人たち、異邦人の王たちがお前の輝きを目指して集まって来る、と告げます。そして最後に、「彼らは皆シェバより来るであろう。黄金と乳香を携えて来て、主の栄光を告げ知らせるであろう」と語ります。

この時代から約500年前に、アラビア半島南部のシェバから、多くの貢ぎ物を携えて一人の女王がエ

ルサレムのソロモン王を訪れたという物語が、旧約聖書に記録されています。ですから、この預言が、イスラエル・ユダ王国が最も繁栄したソロモン時代に、周辺諸民族の王たちが朝貢のためエルサレムに来た歴史を下敷きにしていることは間違いありません。しかし、第三イザヤは、バビロン捕囚とともに断絶したダビデ王家を再興して、イスラエル・ユダ王国のかつての繁栄を取り戻すことを夢見ていたわけではありません。その証拠に、異邦人たちがエルサレムに集まって来るのは、「主の栄光がお前の上に輝くから」と言います。彼が描くイメージは、主、すなわち「天の王」の支配がエルサレムに確立することだったのです。そうすると、諸民族、すなわち異邦人の王たちは、次から次に貢ぎ物を携えてエルサレムに来て、主の栄光、すなわち、主の支配を讃美すると言うのです。「彼らは皆シェバより来る」と言いますが、ここでシェバは最早具体的な地名ではなく、一般的に遠隔の諸国を意味しています。この後すぐ演奏するカンタータ第1曲の歌詞は、まさにこの聖句で、「彼らは皆シェバより来る」と、繰り返し繰り返し歌います。これは、異邦人の王たちが次々に来る様子を伝えているのです。演奏を聴きながら、貢ぎ物を積んだキャラバンを率いて、続々とエルサレムを目指す異邦人の王たちの姿をイメージしてください。

天の王の支配

さて、ナザレのイエスをキリスト、すなわち、メシアだと信仰した初代キリスト教徒は、エルサレムの上に「主の栄光」が輝くという預言は、イエス・キリストの顕現を指していると理解しました。カンタータの第2曲は、このようなメシア預言の解釈に従って、エルサレムに到着した異邦人の王たちとベツレヘムで幼な児イエスを拝み、黄金、乳香、没薬を捧げたマギを重ねたコラールです。ですから、降誕物語では東の国から来たマギが、コラールではシェバから来た王たちになっています。

ここで、アンブロシウスとルターが、「来てください」と呼びかけた「異邦人の贖い主」、或いは「異邦人の救い主」が何を意味しているのか、考えましょう。「贖い」、或いは「救い」は、現在は純粋に宗教的な行為として理解されていますが、「キリスト」の原語「メシア」が、本来、ダビデ家の王の称号であったように、聖書において「贖い」、或いは「救い」は、正義の王が民衆に対してなすべき行為でした。ただし、先程学んだメシア預言が示しているように、究

極の正義の王は「神」に他なりません。

ここで、ルカによる福音書の降誕物語のクライマックスで、イエス・キリストが誕生した夜、天使の大群が歌った讚美、「グローリア」を参照します。「グローリア」は、1行目で、天にいます神に栄光があるように、2行目で、地上では神のみこころにかなう人々に平和があるように、と歌います。この讚美が意味することは、天の王に対する忠誠の誓いと、それと表裏一体の関係ですが、天の王の意志、すなわち、みこころを地上で実現する人々に平和があるように、という願いです。天の王の支配を受け入れたときに、地上に平和が来る、ということです。ここに、第三イザヤのメシア預言を重ねると、エルサレムの上に輝く王、すなわち、メシアの支配を受け入れ、メシアの家来になった諸民族が、家来としてメシアに忠誠を示すために、続々と貢ぎ物を携えて来るときに、当然、諸民族の間の争いはなくなり、メシアの支配の下に地上に平和が確立するのです。

初代キリスト教徒は、このメシアがイエス・キリストだと信じました。ですから、東の国のマギは、イエス・キリストの支配を受け入れた諸民族の代表になります。アンブロシウスとルターが、キリストに「来てください」と呼びかけた「異邦人の贖い主」、或いは「異邦人の救い主」の「異邦人」は、自分たちを含めた全世界の人々であって、最早、選民ユダヤ人と区別された異邦人ではありません。イエス・キリストを「天の王」として、その支配、すなわち、その贖い、その救いを求める人々のことです。しかし、まだエルサレム、すなわち、「天の王国」に入国していない自分たちを「異邦人」と呼びます。今はまだ「天の王国」の住民になっていないと自覚しているのです。カンタータの第1曲で歌う「彼らは皆シェバより来るであろう」も同じことを意味しています。「彼ら」とは、エルサレムという「天の王国」を目指す「異邦人」たちなのです。

捧げ物に相応しい宝物は心

エルサレム、すなわち、天の王国に到着した異邦人の王たちは、遂に天の王、すなわち、幼な児イエス・キリストの顕現を受け、忠節を誓うしるしとして、貢ぎ物を捧げました。これがカンタータ第2曲のイメージです。ここで、マギ、すなわち、王たちが捧げた黄金、乳香、没薬とは何なのか、カンタータは考えだします。そして、よく考えてみると、自分の持っているものすべて、いや自分の存在そのものが王（神）から与えられたものだという事に気

付くと、捧げ物に相応いものを何一つ持っていないことに気がきます。そして、ただ一つ、もし受け取っていただけるなら、「心」を捧げますと歌います。

ここで、顕現祭の福音書を思い出してください。新しい王の誕生を告げる星を発見して、東の国からはるばるエルサレムに来たマギは、ベツレヘムでイエス・キリストの顕現を受けることができました。彼らは新し星を「天」に探し求めたのです。そうです。もし彼らに新しい王を探し求める「心」がなければ、キリストの顕現はありませんでした。逆に、幼な児イエスを殺そうとして探したヘロデに、顕現はありませんでした。こうして、シェバからエルサレムを目指して来た異邦人たちが、イエス・キリストに「心」を捧げて、このカンタータは終わります。

暗闇に立ち向かう「心」を持つ

今から2500年前に、第三イザヤは、神が予定している時が来れば、エルサレムの上に主の栄光が輝き、その栄光を目指して異邦人たちが貢ぎ物を携えて集まって来る。それが、世界に平和が確立する時だ、という預言によって人々を元気付けました。それから500年後、今から2000年前に、ナザレのイエスの教えと行いに強烈なインスピレーションを受けた人々が、イエスによってイザヤの預言は成就されたと信じ、彼らの信仰を世界に広めました。これがキリスト教です。その恩恵を受けて、今、私たちがこうしてクリスマス・コンサートを開いていることは間違いありません。

しかし、同時に、今、主の栄光がどこに輝いているのか。大体、主の栄光が輝く日など未来永劫、来ないのではないか、というペシミズムが世界を覆っていることも事実です。まさに「闇が地を、暗闇が諸々の民を覆っている」のです。もし私たちに、この暗闇に立ち向かう勇気がまだ残っているなら、あのマギのように、もう一度「天」にメシアの星を探し求める「心」を持たなければなりません。イエスが教え、行動し、遂にそのため命を失った「天の王国」を地上に実現しようとする「心」です。

これから演奏するカンタータが、「天の王国」を目指す「異邦人」の熱い心に、私たちが共感を覚えるきっかけになることを願ってやみません。

(石田友雄)

‘みつつ’で‘ひとつ’

2016 バッハの森のクリスマス

2016年のバッハの森のクリスマスは、オルガンによる「アドヴェント・コンサート」、合唱とオルガンとリコーダーによる「クリスマス・コンサート」、そして「家族で楽しむクリスマスの音楽会」の3つで構成されていました。私はハンドベルのメンバーでもあるため、幸運にも全てのコンサートに参加することができました。

アドヴェント・コンサート (12月4日)

まずハンドベルの点鐘、男声による朗唱と続きます。バッハの森のコンサートは、点鐘と聴衆の皆様を巻き込んだ会衆歌を取り入れる進め方が定着しています。その始まりと終わりを告げる点鐘、これはDFAH(レファラシ)のベルを7~8人でランダムに鳴らすものですが、夢の世界に誘(イナ)われるような、そして静寂に戻りふと我に返るような、不思議な心地の良い響きで、自分で振りながらも、何度聞いても気持ちの良いものです。宮本とも子さんのオルガンは、「ライブツィヒ自筆譜コラール集」、「オルガン小曲集」など全てバッハでした。特に私の大好きな“Nun komm der Heiden Heiland”「さあ来てください、異邦人の救い主よ」を様々な編曲で4曲も演奏してくださり嬉しくなりました。会衆歌もこのコラールで、友雄先生訳の言葉に合わせた曲想で歌うことができ、贅沢な時間でした。

クリスマス・コンサート (12月11日)

ヴィクトリアのミサ“O Magnum Mysterium”「おお偉大な神秘よ」、バッハのカンタータ“Sie werden aus Saba alle kommen”「彼らは皆シェバから来た」などの合唱を、鈴木由帆さんのオルガン、辺保陽一さんと大塚照道さんのリコーダーの共演で、イエスの誕生と賢者(または王)たちが贈り物を捧げる場面を唱いました。カンタータは、ソプラノは高音が続き難しかったのですが、鈴木由帆さんのよーく練られたオルガンと、ある時は同じ旋律で寄り添うように、またある時はソプラノのはるか上で星がキラキラ導いてくれるようなリコーダーがついて、味わい深い、喜びに溢れた華やかな響きとなりました。いつもながら、とてもよく考えられたプログラムです。特筆すべきは友雄先生の聖書朗読で、このところルター訳の聖書を日本語訳にしてくださいませ。500年前のドイツ語は文字や綴りが少々違い、私にはす

ぐ発音できません。語順の関係で呪文的(?)なところもあり、この友雄先生のこだわりの訳はバッハをより理解するには意義のあることだと思います。

家族で楽しむ

クリスマスの音楽会 & 祝会 (12月17日)

スライドを交えたイエスの降誕物語をしました。語り、オルガン、声楽、器楽アンサンブル、ハンドベルと盛り沢山ですが、お子さんが見ても楽しいプログラムになりました。声楽アンサンブルのヴィクトリア“Ne timeas Maria”「恐れるな、マリアよ」、グレゴリオ聖歌“Hodie Christus natus est”「今日キリストは誕生した」はバッハの森の定番の曲ですが、その清らかな旋律に何度でも唱いたくなる曲です。

祝会でのミニコンサートでは、潤ちゃん(中2)と英(ハ)ちゃん(小2)が、お父さんたちの伴奏付きで「2つのヴァイオリンのための協奏曲ニ短調」(BWV 1043)を演奏しました。生まれた時から知っているこの2人のヴァイオリンを聴くのは初めてで、ある時は優しく弓を引き、ある時はキリッとした表情で素敵な音を奏でる姿に、すっかり感動してしまいました。自分も参加したかったのでしょうか、ウズウズする小さなお子さんたちがバックステージダンサーよろしく、お母さんの必死の制止を振り切って後ろで走り回っているのも、楽しい和やかなひとときでした。

以上、‘みつつ’のコンサートで‘ひとつ’に完結した、私の2016年のクリスマスでした。(三縄啓子)

10. 12 来訪 八田美穂氏 (みんつく子育て情報レポーター)
10. 13, 20, 27 運営委員会 参加者各 4 名。
10. 16 宮本とも子・オリジナル・イタリアン・パイオルガン・レクチャー・コンサート 参加者 40 名。
11. 10, 17, 24 運営委員会 参加者各 4 名。
11. 19 通し練習・クリスマスの音楽会 参加者 12 名。
11. 26 通し練習・クリスマスの音楽会 参加者 10 名。
12. 1, 8, 15, 22 運営委員会 参加者各 4 名。
12. 2 クリスマス飾り付け 参加者 5 名。
12. 3 通し練習・アドヴェント・コンサート 参加者 7 名。
12. 4 アドヴェント・コンサート 宮本とも子・オルガンリサイタル 参加者 33 名。
12. 11 クリスマス・コンサート 参加者 49 名。
12. 17 クリスマスの音楽会 参加者 36 名。
クリスマス祝会 参加者 27 名。
12. 22 クリスマス飾り付け片付け 参加者 5 名。
12. 23~2017. 1. 5 冬期休館
12. 28 来訪 桑田穰氏 (ヴァイオリニスト)

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

コラール・カンタータ研究
コラールとカンタータ (JSB)

10. 15 三位一体後第 15 主日のカンタータ「全地において御神に歓呼の声をあげよ」(BWV 51); コラール「主を誉めまつれ、わがうちなるもの」。オルガン: J. S. バッハ「さあ誉め称えよ、主を、私の魂よ」(BWV 390)、笠間きよ子。参加者 14 名。
10. 22 第 409 回、オルガン: J. G. ヴァルター「さあ誉め称えよ、主を、私の魂よ」、笠間きよ子。参加者 11 名。
10. 29 三位一体後第 22 主日のカンタータ「備えよ、私の霊よ」(BWV 115); コラール「わがたま備え」。オルガン: J. S. バッハ「それゆえ常に目覚め」(BWV 115/6)、海東俊恵。参加者 14 名。
11. 5 第 410 回、オルガン: J. G. ヴァルター「備えよ、私の霊よ」、海東俊恵。参加者 15 名。
11. 12 三位一体後第 23 主日のカンタータ「幸いである、その神に本当に子どものように自らを委ねることのできる者は」(BWV 139); コラール「幸いなるかな、主に身を委ね」。オルガン: J. S. バッハ「だから陰府の軍勢をもともしない」(BWV 139/6)、當眞容子。参加者 11 名。

11. 19 第 411 回、オルガン: J. C. キッテル「神よ、あなたの慈しみに従って私になさってください」、當眞容子。参加者 17 名。
11. 26 アドヴェント第 1 主日のカンタータ「さあ来てください、異邦人の救い主よ」II (BWV 62); コラール「いざ、来たりませ」。オルガン: J. S. バッハ「父なる神に讃美が捧げられるように」(BWV 62/6)、安西文子。参加者 11 名。
12. 3 第 412 回、オルガン: D. ブクステフーデ「さあ来てください、異邦人の救い主よ」(BuxWV 211)、鈴木由帆。参加者 12 名。

学習コース

- バッハの森・クワイア (混声合唱) 10. 15/17 名、10. 22/15 名、10. 29/16 名、11. 5/16 名、11. 12/19 名、11. 19/16 名、11. 26/12 名、12. 3/17 名、12. 10 (ゲネプロ) /21 名。
- バッハの森・ハンドベル・クワイア 10. 15/4 名、11. 5/4 名、11. 19/4 名、11. 26/5 名。
- バッハの森・声楽アンサンブル 10. 15/6 名、11. 12/6 名、11. 26/7 名。
- バッハの森・器楽アンサンブル 10. 29/5 名、11. 5/5 名、11. 19/5 名、11. 26/5 名。
- オルガン音楽研究会 10. 14/6 名、10. 28/8 名、11. 11/8 名、11. 25/8 名。
- コラール研究会 10. 14/4 名、10. 28/8 名、11. 11/6 名、11. 25/7 名。
- クラヴィコード・オルガン教室 10. 28/3 名、11. 25/3 名。
- オルガン・クラブ 10. 21/2 名、11. 4/2 名、11. 18/3 名。
- 読書会: 聖書 10. 15/8 名、10. 22/7 名、10. 29/7 名、11. 5/7 名、11. 12/7 名、11. 19/9 名、11. 26/6 名、12. 3/6 名。
- オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習 10. 11/2 名、10. 12/2 名、10. 13/1 名、10. 14/1 名、10. 15/1 名、10. 18/3 名、10. 19/1 名、10. 20/1 名、10. 21/2 名、10. 22/2 名、10. 25/1 名、10. 26/1 名、10. 27/2 名、10. 29/1 名、11. 1/2 名、11. 2/1 名、11. 4/2 名、11. 5/2 名、11. 8/1 名、11. 9/1 名、11. 10/1 名、11. 11/1 名、11. 12/2 名、11. 15/2 名、11. 16/1 名、11. 17/1 名、11. 18/3 名、11. 19/2 名、11. 24/2 名、11. 25/1 名、11. 26/1 名、11. 29/1 名、11. 30/1 名、12. 1/2 名、12. 2/1 名、12. 3/2 名、12. 6/1 名、12. 7/1 名、12. 9/2 名、12. 10/1 名、12. 13/1 名、12. 14/1 名、12. 15/2 名、12. 17/1 名、12. 20/1 名、12. 22/2 名。